

第1回高知県立高知国際中学校・高等学校 学校説明会 要点

平成29年2月26日(日) 13:00~15:40

高知追手前高等学校(芸術ホール)

●開会の挨拶要点

高知県教育長 田村壮児

【学校説明会について】

- ・本日は沢山の方にお越しいただき、また別会場でもご参観いただきありがとうございます。
- ・本説明会は、申込初日に定員の500名を大幅に超えた申込があり、2回目も実施することにした。
- ・多くの皆様に新しい学校への関心をもっていただいたこと、嬉しく思う。
- ・この学校は、高知南中学校・高等学校と高知西高等学校が統合することにより、開設する学校。
- ・H30年4月に中学1年生を迎えることになる。(H33年に高校に新入生を迎える)
- ・施設は、現在の高知西高校のものを使用。ホールや食堂、特別教室については、増築中。

【学校の教育目標について】

- ・国際的な視野をもち、地域や国際社会の発展に寄与できるような人材育成を目指している。
- ・英語教育を中心とするのではなく、新しい課題を発見し挑戦していく姿勢や、多様な人と協働し、新しい価値を創造できる能力を養う。

【新しい学校の特徴である国際バカロレア(IB)の教育プログラム】

- ・中学校と、高校のIBコースに、この教育プログラムを導入予定。
- ・教育内容は、新しい学校の教育目標を達成するためのキーになると考えている。
- ・IBコース以外のクラスにも、この教育内容のエッセンスを取り入れていく。

【本日の講師について】

- ・株式会社ベネッセコーポレーション 高校営業部 営業企画課 課長：南部 現(なんぶ あきつ)氏
- ・国際バカロレア機構アジア太平洋地区委員：坪谷ニューウエル郁子(つぼや にゅうえる いくこ)氏
- ・教育改革や新しい学び方、また国際バカロレアとは、どのような教育なのかを会場の皆様にお示しいただけると思う。

【社会環境の変化】

- ・社会や経済の姿が大きく変貌し、予測できない社会変化が起きている。
- ・子供たちを取り巻く環境の変化も進んでおり、それに伴い、教育も変わってきている。
- ・例えば、今ある仕事の半数から6割は新しい職業になっている、と言われている。
- ・このような中で、教育も変わっていかなければならない。

【最後に】

新しい学校の取組は、高知県におけるリーディングプロジェクトとしての教育改革のひとつでもある。この説明会で、新しい学校の方向性をご理解いただきたい。

保護者の皆様におかれましては、お子様の進路のご参考に、教育関係の皆様には、これからの進路指導の参考にさせていただければと思う。

●講演要点

講演Ⅰ：「教育改革で何がかわるのか？ ～中高での学習で意識したいこと～」

株式会社ベネッセコーポレーション 高校営業部 営業企画課長 南部 現 氏

- ・子どもたちを取り巻く環境が変わってきている。
- ・現在の中学2年生は、新しい大学入試に突入していく学年である。(センター試験に代わる新テスト)
- ・日本の高校生は、他国の高校生に比べて自己肯定感や社会への参画意識が低い。(資料7、8)
- ・社会に出て活躍する可能性が高い生徒は、自分で考えて行動できる生徒である。そのためには、教育をとおして「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」が大事になってくる。(資料9、10)
- ・これからの教育が目指すものは、自ら課題を発見し、他者と協働し、その答えを作り出す力。高知県の新しい学校が目指すものも、ここにあるのではないか。(資料16)
- ・大学側も変化を求められている。そのひとつが入試問題である。(資料17、18、19、)
- ・大学入試の具体的なイメージ(資料22)。このような問題は、今の40代前後の保護者世代が受験した時には、見受けられなかった。昔は、「〇〇を抜き出さない」、「〇〇について説明しなさい」といったものが多かった。
- ・国語を国語のみで使う力ととらえるのではなく、国語を通じて(いわゆる資質・能力を通じて)、情報を抽出し吟味する力、他者との関わりから自分の考えをより深める力が求められている。(資料23)
- ・これからは、5教科の力の育成が大事なのではなく、5教科の力を通じてその先にある深い学びを育成することが大事。
- ・大学入試の変更点のひとつは、国公立大学の推薦入試の拡大。(資料24)これは、教科学力だけでなく、さらにその上の教科学力以外の力も必要になるということである。
- ・今、大学入試で求められることは、「自身が解決したい社会の問題」「自分が学ぶことで何をしたいのか」を問われるようになってきている。(資料26、27)
- ・学校でどんな学びをしているのか、何を学んでいるのか、何を表現しているのかが問われる大学入試に変わってくる。(社会でも求められてくる)
- ・大学や社会で求められる「協働力」、「探究力」、「思考・判断力」を教育現場でどのように育成するのか。『なぜ?』『どうして?』『どうする?』『その訳は?』『だから?』『どうしたいの?』『どういうこと?』といった、子どもに対して考えるきっかけ(発話)が大事。
- ・「思考力・判断力・表現力」を問う出題になってくると、学び方そのものを見直す、考えていく必要がある。(資料28)
- ・「どのように学ぶか」は、主体的、対話的で深い学びが強く求められることであり、新しい学校でも意識していくことだと思う。(資料30)
- ・「学びの型が進化する」とは、これまでの学習方法をおろそかにするというだけでなく、これまでの方法に新たな方法(主体性、多様性、協調性)が加わるということ。それを見取るためには、『ポートフォリオ(活動履歴の蓄積)』などで、学びをふり返ることが大事になってくる。(資料32)
- ・「バカロレア」や「国際」と聞くと、英語をやらなければいけないと思いがちであるが、「英語を学ぶ」のではなく、「英語で学ぶ」といったことが、これからは求められると思う。
- ・これからの学びは、個人で深く考え、それを他者と意見を交換することで新しい考えを知ることである。これは学校だからできることであり、人が集まるからこそできることである。

講演Ⅱ：「国際バカロレアの概要 ～世界と日本～」

国際バカロレア アジア太平洋地区委員 坪谷 ニュウエル 郁子 氏

- ・国際バカロレア（以下IB）は、スイスのジュネーブで設立された非営利教育機構。理念は、「多様な文化の理解」「探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」を目的にしている。
- ・人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、生涯学び続けられるよう働きかけている。
- ・10の学習者像をもった資質の育成をするのがIBである。（資料4）
- ・英語のできる人を育てるのではないのか？それがグローバル人材の育成ではないのか？といった質問を受けることがあるが、IBは全人教育であり、10の学習者像のような人材育成することにある。これがグローバル人材の育成である。
- ・IBのプログラムには、4つのプログラムがある。（資料5）
- ・IBの導入校が世界でどのように増えているか。低学年（PYPやMYP）から育てていこうというのが、世界の傾向である。さらに南米エクアドルは急速にIB校の導入が進んでいる。アジアでは、インド、中国、パキスタン、マレーシア、インドネシアでの導入が増えている。（資料7）
- ・MYPとは、どのようなものか。これを終えると、生徒は自分は何が好きか、何に興味があるのか、何が得意なのかがわかるようになる。（資料8）
- ・DPでは、自分の好きなこと、得意なことを生かしてどのように社会貢献していくのかを見つけていく。（資料9）
- ・DPは理系、文系に分かれていない。極めてリベラルアーツ（大学で学ぶ教養課程）に近い形である。
- ・カリキュラムについては、6つのグループと3つのコアを履修する。（資料10、11）
- ・12日間にわたる卒業試験についての例（資料12、13、14）こういった問題に対して、生徒は論文を作成し、プレゼンテーションをする。
- ・DPの終了資格条件について（資料15）。ここ最近の平均点は30点前後でその取得率は8割程度ということから、IBのスコアは信頼に値すると言われている所以である。試験は、5月と11月に世界中で一斉に実施される。
- ・世界のスコアの活用の仕方には、英国式と米国式がある。（資料16）英国式とは、日本におけるセンター試験のように基準があり、換算表によって読み取れるようになっている。（資料17、18）米国式は、SATという試験を全員が受験しなければならない。その上にIBのスコアに加点する方式をとっている。（資料20、21、22）
- ・IBの生徒は、どのような学部を選択しているのか。（資料23）
- ・産業界から求められていることは、「考える方法」「働く方法」「働くためのツール」「世界の中で生きること」（資料24）これは、OECD（経済協力開発機構）からも同様のことが言われている。
- ・日本の産業界から「IBのディプロマ課程はグローバル人材を育成する上で有効な手段の一つである」、また、「大学入試における活用や企業採用時や人材育成において適切に評価することが必要」と提言があった。（資料27）
- ・政府の方針としては、2018年までにIB認定校を200校に増やすと閣議決定された。（資料28）
- ・日本の大学はIB卒業生を受け入れる体制を作り始めた。（資料30）
- ・国立大学の入学者の定員の30%をAO入試、国際バカロレア入試を取り入れて拡大していく（資料31）

- ・自分の学校で生徒を見て感じることは、「子どもたちは私たちの未来である」「教育は子どもたちを変える力がある」ということは、教育で未来は変わるということ。
- ・世界を、日本を、四国を、高知をより良くすることに活躍できる人材を育成するための新しい学校が高知にできる。公立中学校・高校にできるということは、国際バカロレアだけでなく、日本のすばらしい教育の融合ができるということ。これは、基礎学力の力が強いということだけでなく、道徳心や協働、共同する力が育成されということになる。
- ・高知から新しい人材が出てくるのが楽しみである。私も一生懸命、応援したい。

学校説明・質疑

高知県教育委員会事務局高等学校課 課長補佐 高野 和幸

【学校の概要について】

- ・高知国際中学校・高等学校は、これまでにない自分で探究的な学習に取り組み、次期学習指導要領を先取りする教育内容を行う。
- ・指導にあたる教員の養成や確保はもとより、開校までに教育計画をしっかりと作り上げ、よりよい教育を提供していくことを考えている。
- ・高知国際中学校・高等学校は、県立高等学校再編振興計画に基づき、高知南中学校・高等学校と高知西高等学校の統合によりできる新しい学校であり、両校の関係者の皆様、また、多くの保護者の皆様のご期待にも応えるべく、県教育委員会として、責任をもって取り組んでいく。
- ・高知国際中学校・高等学校の理念として、「地域や国際社会の発展に貢献できるグローバル人材の育成」を目指す。
- ・教育理念を実現するための教育目標は「グローバル社会で求められている高い志と、資質・能力を育む」ことである。(パンフレット p 1)
- ・これからの本県のグローバル教育のトップ校としての取組は、「英語教育の充実」、「探究型学習の推進」、「キャリア教育の推進」をあげている。(パンフレット p 1)
- ・「英語教育の充実」については、外国人教員による授業や、英語以外の教科の内容を英語で学ぶ活動を多く取り入れていく。
- ・「探究型学習の推進」は、中学校では国際バカロレアのMY Pに準拠した教育をとおして課題解決能力を育む。高校では中学校での学習の成果をもとに、大学の学びにつながるような、より高度な課題研究に取り組む。
 - ・「キャリア教育の推進」は、高知南中学校・高等学校で国の研究指定事業により、長年培ってきたキャリア教育の実践の成果を生かして、生徒が自ら自分の将来について考える機会をつくる。進路指導を徹底する。

【国際バカロレア（IB）の認定校になるには】

- ・IB認定までの流れは、IB機構に認定について関心があることを登録する「関心校」、IB機構から認定を受けるためのアドバイスを受けながら準備をする「候補校」、IB機構から認定を受けた「認定校」の3段階がある。
- ・高知国際中学校・高等学校は、現在は「関心校」の段階。高知国際中学校は、平成30年4月にMY

P候補校の申請を行い、2年間の準備期間を経て、平成32年の夏ごろにMYP認定校となる予定。

- ・MYPは候補校の段階からIB教育を正式に行っておりよいことになっているため、中学1年生の段階から正式なMYPが始まる。
- ・高知国際高校は、平成31年4月にDP候補校の申請を行い、開校する平成33年4月までにはDP認定校となる予定。

【高知国際中学校について】

- ・中学校は、IB教育のプログラムを用いながら、日本の学習指導要領に基づいた学習を行い、グローバル人材の基礎となる英語運用能力や探究力を育成する。(パンフレットp3)
- ・学校外での課外活動を充実させる。国際的な課題から地域の課題をテーマとして、主に県内の各地域をフィールドとして、放課後や休日、夏休みなどの長期の休みを活用することになる。学校も支援していくが、学校だけでなく、ご家庭のご支援が必要になるため、ご理解・ご協力をお願いしたい。
- ・時間割の例としては、他の中学校とカリキュラムに変わりはないが、主体的な活動時間を確保し、確かな学力を身に付けるために、1週間に32時間の授業を実施する。
- ・基本的には1日6限だが、週2回は1日7限まで授業がある。パンフレットの6ページに例を掲載しているが、あくまでも例である。確定したら、今後作成するパンフレットなどでお知らせする。
- ・中学校の主な行事については、プレゼンテーション大会やIB校との交流ワークショップなど、IB校としての特色を活かした行事を計画している。(パンフレットp6)
- ・中学校では、授業の中で、生徒同士で話し合ったり、発表する時間があるため、放課後やご家庭での学習が重要になってくる。また、奉仕活動や課題研究など、放課後や休日を活用しての学習が用意されている。
- ・そのため、部活動については、一定の制限を設け、平日の活動時間は原則18時までとし、早朝練習は行わない予定。活動日は、原則として平日の週3日と土曜日とし、日曜日等の公式大会などについては許可制となる予定。なお、他の国公立のIB認定校においても、課外活動等の時間確保のために部活動には一定の制限を設けていることが多いと聞いている。
- ・設置する部活動は、現在、施設などの条件も踏まえながら具体的な内容を検討している。明確になった段階で、今後の学校説明会などでお知らせしていく。

【高知国際高等学校について】

- ・普通科、グローバル科ともに文系・理系の進路希望に応じた教科が選択できる。
- ・授業は週33時間で、週に3日、7限まで授業がある。普通科、グローバル科ともに、文系、理系を問わず、しっかりと学習できるカリキュラムとなっている。
- ・普通科は、「多様な進路選択に対応」するカリキュラムになっている。また、「主体性と自主性の醸成」を図るために、平成27年度から行っている文部科学省の事業である高知西高等学校のスーパーグローバルハイスクールで培った「グローバル探究」による取組を生かし、発展させながら、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を養っていく。
- ・グローバル科は、1年次から探究コースとIBコースに分かれる。探究コースは、高い英語運用能力と探究力を身に付け、より高度な言語活動に取り組むことで、国際感覚と行動力を育成する。
- ・IBコースは、高い英語運用能力と探究力を身に付け、世界標準のIBのDPを実施するコースであ

る。DPは2年間のプログラムで1年の11月から始まり、3年の11月に最終試験を実施する。
(1年の10月までは、学習指導要領に定められた科目の授業を実施)

【施設について】

- ・中学生の教室は北舎に入り、新しくできる共用棟は中高生ともに使う特別教室などである。中学校が開校する平成30年4月には、全館がWi-Fi完備となり、県立学校では、グローバル教育推進校である高知南中学校・高等学校と、この学校の2校のみである。(パンフレットp9)

【高知国際中学校の入学者募集について】

- ・正式に決定していないため、現段階での考え方は以下のとおりである。
- ・入学定員は原則男女30名程度の計60名の予定。
- ・検査日時は、現行の県立中学校と同じ考え方で進めている。
- ・検査会場は、高知西高等学校となる予定。

【検査内容について】

- ・小学校では国語や社会の分野に当たる「言語コミュニケーション分野」として適性検査A、同じく算数と理科の分野に当たる「数理・自然科学分野」として適性検査Bとして、それぞれ40分間で実施している。
- ・次期学習指導要領でも求められている深い学びにつながるように、思考力や表現力をこれまで以上に問う問題としたいと考えており、検査時間も40分から延長したいと考えている。その他に、400字程度の作文と個人面接を実施している。

【通学区域について】

- ・県内全域とするということで、1月に正式決定した。
- ・県内の小学6年生であれば、どなたでも志願できる。
- ・県外の小学生であっても一定の条件を満たせば、志願できるようにしたいと考えている。
- ・検査の実施内容などの、詳細については平成29年3月末、検査日は平成29年6月頃には正式決定する予定。決定したら、高等学校課のホームページ及び、高知国際中学校・高等学校のホームページに掲載するので、この学校に関する情報はそちらをご覧ください。

【事前の質問への回答】

Q. 授業はすべて英語で行うのか。

A. 英語以外の教科の授業は基本的に日本語で行う。この学校での授業は基本的には探究力を養うことを目指しており、深い学びを実践していくためには母国語が適している。IB教育は、母国語を大切にすることを重視している。英語の授業は、外国人教員を中心に英語で行う。

Q. 学校での英語は、アメリカ英語なのか、イギリス英語なのか。

A. 文部科学省が示している標準的な英語で行う。英語で自分の考えを相手に伝えることができ、相手の意見を踏まえたうえで、議論し、お互いの理解を深めることができる、より実践的な英語運用能力が身に付くことが重要であると考えている。

- Q. 英語力や国際力だけでなく、日本人としての資質をどのように指導していくのか。
- A. 日本の歴史や文化などについて理解を深めたいと、異文化を尊重する姿勢を養う。例えば、「外国と比較した日本人の気質」について、課題研究に取り組むといったことが考えられる。
- Q. 授業は英語重視か。
- A. 英語運用能力を育成することは、この学校の大きな目標の一つであるため、英語を重視したカリキュラムになっているが、英語をコミュニケーションのツールとして駆使できることを前提としながら、自ら考え探究し、生涯学び続ける姿勢を養っていくことが重要であると考えている。
- Q. 高校入学後、バカロレア科と普通科に分けられるのか。中学校入学時からバカロレアだけのクラスで高校まで進学するのか。
- A. 学校パンフレット第2号p 2下参照。高知国際中学校の生徒は、基本的に高知国際高校のグローバル科に入学する。高校のグローバル科の入学定員は80名であるため、残りの20名は、他の公立中学校や高知南中学校から入学することになる。
- さらにグローバル科は、1年次から国際バカロレアのIBコース（20名）1クラスと、探究コース（日本の学習指導要領に基づく学習活動を行う60名）2クラスに分かれて学習する。
- IBコース、探究コースの選択は、中学校の3年間をかけて、生徒の将来の希望や適性を総合的に判断しながら、進路指導していく。
- 普通科（200名）には、他の公立中学校や高知南中学校などから入学し、5クラス編成となる。
- Q. IBのカリキュラムを導入すれば、通常の学校で実施されている内容のどの部分が省かれるのか。
- A. MYPでIB機構が規定しているのは、基本的な学習計画の立て方や学び方であり、学習内容は、日本の学習指導要領に準拠したものになるため、特に省かれる内容はない。ただし、事前の調べ学習や基礎知識の習得、課題研究のまとめなどを家庭で行う学習時間の確保が、非常に大切になってくる。
- Q. 週5日制か6日制か。
- A. 基本的には週5日制であるが、土曜日にも生徒が自ら調べて探究していく課題研究などの課外活動を実施する。課外活動は、特別活動の時間に計画の立て方などの事前説明を行い、生徒が自ら計画、行動、振り返りを行うものである。放課後や休日、内容によっては夏休みなどの長期の休みを活用し実施する。ご家庭のサポートも必要になってくるため、ご協力をお願いしたい。
- Q. 寮はあるのか。自転車通学は可能か。JRでの通学は可能か。
- A. 学校パンフレット第2号の10ページのQ3でもお答えしているように、設置の予定はない。通学区域については、県内全域を対象としているので、特に通学手段や距離などの制限は考えていない。
- Q. 給食はあるのか。
- A. 現段階ではお答えできない。今後の学校説明会でご説明したい
- Q. 中学校の年間の授業料はいくらか。授業料以外に必要な費用はあるのか。
- A. 学校パンフレット第2号の10ページのQ6にあるように、公立中学校なので授業料は必要ない。ただし、授業料以外には、他の県立中学校と同程度の教材費とPTA会費等で年間約4万円が必要。
- Q. 高校の年間の授業料はいくらか。授業料以外に必要な費用はあるのか。
- A. 学校パンフレット第2号の10ページのQ6にあるように、授業料は、保護者の所得によっては、最大で年間11万8千8百円が必要となる。国の就学支援金制度により、平成28年度実績で高校生全体の約87%の方は、授業料は不要となっている。なお、就学支援金制度については、4人家

族で保護者のうちどちらかが就労している場合、年収が910万円までの方が制度の対象となり、授業料を納付する必要がなくなる。

授業料以外に必要な費用は、探究コースは、県内の県立高校の進学校と同程度の教科書や教材費の購入や模擬試験等の受験料などが3年間で18万円程度が必要。

I Bコースへ進学した場合は、ディプロマ・プログラムのテキスト代や最終試験の受験料など3年間で約20万円程度が必要となり、他の県立高校とは約2万円程度の差となる。これ以外にも修学旅行の費用や、部活動に係る費用が必要。

Q. I Bコースに進まない場合、教育課程や内容は違うのか。また、コース分けはどのように行うのか。

A. I Bコースは、I BのDPを中心に実施する。探究コースは、学習指導要領に基づいたカリキュラムを実施する。コース分けは中学校の3年間かけた進路指導の中で行う。

Q. 今までの学校の内容と違うことや、進路などが心配されるが大丈夫なのか。

A. 中学校では、学習指導要領に則った学習を進めていくため、学習する内容は他の公立中学校と同じである。違うのは学習方法であるが、基礎的な知識を学んだ上で、他の生徒と協働して探究的な学習を展開していくことは、国も次期学習指導要領において改訂しているところである。これまでの学習方法と大きく異なる点は、生徒の評価を生徒にフィードバックし、生徒はそれを基に、次の段階に活かしていく「振り返りの作業」を、高校卒業まで常に繰り返して行うことである。

Q. 海外の大学に進学する場合、I Bのスコアだけで合格できるのか。

A. 国や大学ごとに入試の要件は異なる。例えば、イギリスやカナダの大学では、DPスコアと面接で入学できる大学がある。アメリカではDPスコアに加えて、日本のセンター試験に当たるSATや英語検定に当たるTOEFLの結果が求められる。DPスコアでなく、DPの中の特定の科目の成績だけが求められる大学もある。例えば、医学部は数学と物理の成績だけで良いという大学がある。従って、生徒が進学したい大学の入試の方針を調べて、DPで選択する科目を決める必要がある。

Q. 県内にDPスコアを活用して受験できる大学はあるのか。

A. 現在のところ、県内大学の中にDPスコアによる入試を実施する大学はない。文部科学省とも連携して要請をしているところである。なお、全国的にはDPスコアを活用した入試を実施する大学は増加している。

Q. 海外の大学に進学した場合、学費はどの程度かかるのか。

A. 大学によって大きく異なる。アメリカの大学では年間430万程度。生活費も含めると2,000万円程度かかる場合があるし、国立、私立でも違う。一方、ドイツでは無償など国によって様々である。こうしたことから、中学生のうちから生徒が自分自身の将来の進路について考える機会を多くもち、国内外の大学についてしっかりと進路指導できる体制をつくり、生徒の自己実現を支援していく。

Q. 海外の大学受験を考えていないと入学できないのか。

A. グローバル科では、海外大学への進学も視野に入れているが、基本的には日本語で学習するため、国内大学への進学が中心になると思われる。国内大学、海外大学に関わらず、生徒の進路実現に向けてサポートしていく。

Q. 高知市以外から入学できるのか。その場合、市内枠、市外枠のような枠があるのか。

A. 通学区域は設けないため、県内どこからでも志願でき、市内枠や市外枠といった枠は設けない予定。

Q. 入試は抽選か。

A. 抽選は考えていない。

Q. 発達障害のある生徒の受け入れは可能か。

A. 受け入れは可能。入学が決定すれば、保護者の方などと、どのような支援が必要なのかご相談したいと考えている。

Q. 奨学金制度はあるのか。

A. 現在、高知県高等学校等奨学金制度がある。貸与金額は、月額18,000円、又は23,000円から選ぶことができる。中学校を通じてご案内する。必要な方はお申し込みください。

Q. 国際バカロレアを学ぶ子どもの性格に向き、不向きはあるのか。

A. IB教育は全人教育であり、生涯にわたって学び続けることができる力を育成するものであるため、お子様の性格によって向き、不向きがあるといったものではない。お預かりした生徒が、IBが目指す学習者となれるように、支援していく。

Q. 指導できる教員はどのように確保及び育成するのか。

A. IBの教員として教壇に立つためには機構が主催するワークショップに参加して資格を得る必要がある。現在、計画的にワークショップに参加している。また、IB認定校である東京学芸大学附属国際中等教育学校に2年間ずつ教員を派遣している。

現在、英語教員1名が2年間の派遣を終えて帰ってきており、現在さらに4名の教員を派遣しており、今後も派遣していく予定。中学校が開校する平成30年度までに13名の教員を派遣し、高知国際中学校に配属される教員全員が、実際にIB教育に携わったことになるように計画している。また、これとは別に、現在、5名のIB教育推進チームが高知県教育センターでIBの教育を実践するためのカリキュラムの作成などの研究を進めている。

【当日、会場での質疑応答】

Q. 中学校は、1クラス何名の何クラスあるのか。

A. 基本的には1クラス30名の2クラスであるが、授業によっては、少人数指導で例えば20名ずつで実施することもある。

Q. 施設は各学年3クラスの教室が設置されているが、H33年からの定員80名に対応できるのか。

A. 最終の80名に対応できるように設計している。

Q. 高知国際中学校が自分に合わなければ、高校段階で、普通科や他校に行くことはできるのか。

A. 可能ではあるが、中高一貫の教育を実施していくために、できる限り生徒の希望に沿うようなサポートに努める。

Q. 海外の学校との交換留学等、受け入れはあるのか。

A. 高知国際中学校・高等学校がまだ開校していないため、現段階での姉妹校はないが、高知南中学校・高等学校や高知西高等学校の姉妹校との留学制度を引き継いでいければと考えている。

Q. 高知南中学校に進学した場合、高知国際高等学校への進学は、再度、受験が必要か。

A. 中高一貫校のため、いわゆる中学校から高校へ進学する場合の選抜試験はない。

(学校パンフレット第2号p2の下段※1参照)

Q. 現在の県立中学校3校の入試は作文以外は同じ内容であるが、高知国際中学校も同様か。

A. 内容については正式な決定がされていないので、現在はお応えできない。なお、3月末頃には決定する予定である。

Q. 本年度、体験セミナーが何回か実施されたが、今後もこのような機会を増やしていただきたい。

A. 本年度は体験セミナーを3回実施し、沢山の方にご参加いただいた。しかし、すぐに定員に達し、まだご参加いただけていない方もいるため、来年度も複数回計画し、できるだけ多くの方にご案内したいと考えている。また、併せて学校説明会も実施する予定である。ホームページ等でも情報発信していくので、ご確認いただきたい。

Q. 中学校の修学旅行は海外を予定と記載されているが、その費用はどれくらいを予定しているのか。

A. 具体的なことは、今後検討していくことになるが、できるだけご負担のないようにしたいと考えている。行き先についても、これから検討していく。

●閉会の挨拶要点

高知県教育委員会事務局 教育次長 藤中 雄輔

- ・本日はお集まりいただきありがとうございました。
- ・本日の内容は、皆様が期待していたものだったでしょうか。沢山のご質問もいただいたが、平成30年度の開校に向けて、今後も説明会を実施していく。
- ・具体的な内容については、できるだけ早く、その都度、説明会やパンフレットでお知らせしていく。
- ・これから、教育委員会としてもご期待にそえるような立派な学校にしていきたいと考えている。
- ・今、世の中の仕事のあり方が大きく変わってきている。このような中で、教育で何ができるのかを考えるとやはり教育プログラムも変えていく必要がある。
- ・高知県としては、6年間の中高一貫教育校で、国際バカロレアの有効な教育プログラムを取り入れていきたい。
- ・新しい学校のために、県をあげて取り組んでいく。皆様、どうぞ、よろしく願います。